

連載コラム

みずき野と その周辺の 植物と昆虫

第7回 カヤツリグサのいろいろ



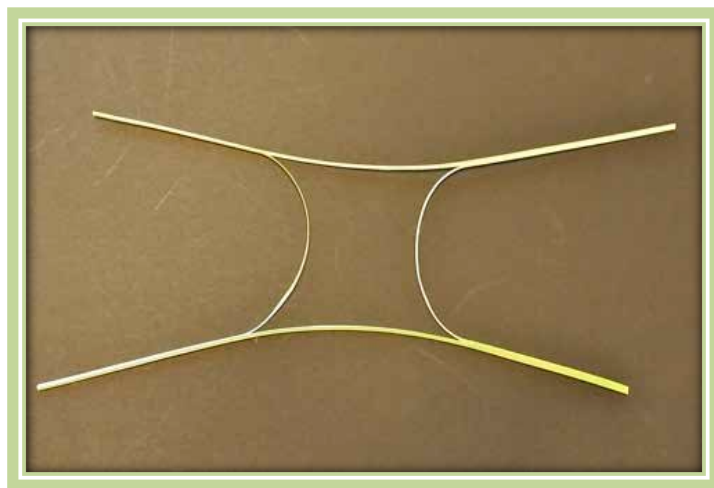
本吉總男

みずき野とその周辺の植物と昆虫

(7) カヤツリグサのいろいろ

カヤツリグサの名称は、切取った茎を両端から裂いて、蚊帳（かや）のかたちを作る子どもの遊びに由来するものです。

カヤツリグサの茎は三稜形（切断面が三角）です。蚊帳吊りの遊びは二人で行います。それぞれが片側から同時に茎を裂いて進めると、うまく行けば蚊帳のかたちが作れます。蚊帳のかたちを作るには、片方は2面の間を縦に裂き、もう片方は横に裂き、裂けた面が茎の中央ですれ違うようにします。



カヤツリグサで蚊帳のかたちをつくる遊び

昔は夏になると家の中に蚊がたくさん入ってきたので、寝所には蚊帳が必要不可欠でした。今は、網戸によって家に蚊が入ることが少なくなり、昔のように蚊帳を吊る習慣もなくなりました。蚊帳を必要とした世代よりも、蚊帳を見たことがない世代の人たちの方が今は多いのではないのでしょうか。

蚊帳がなくなってしまうと、カヤツリグサによる「蚊帳吊り遊び」も必然的になくなってしまいます。でも、カヤツリグサという名称の中には、昔は蚊帳というものがあって、「蚊帳吊り」という遊びがあったことが、いつまでも碑文のように刻み込まれています。

ところで、カヤツリグサという名称は二つの意味に使われます。広義では、いろいろなカヤツリグサの仲間の総称で、狭義では、ずばりカヤツリグサという種名をもつカヤツリグサを指します。

「蚊帳吊り遊び」によく使われたカヤツリグサ（総称）は、カヤツリグサ（種名）、チャガヤツリ、コゴメガヤツリの3種ではないかと推測しています。路傍や野原にたくさん生えていて、「蚊帳吊り」にちょうどよい大きさだからです。

カヤツリグサの名はすでに江戸中期の俳句に出てきます。「蚊帳吊り」はこの時代にも野の遊びの一つだったのでしょう。

翁にぞ蚊屋つり草を習ひける 立花北枝

北枝（ほくし）は金沢の人で、松尾芭蕉の門人です。芭蕉翁はカヤツリグサを折り取って、北枝に蚊帳吊り遊びを教えたのでしょうか。そんな微笑ましい情景を目に浮かべました。

奥の細道の旅の途中、金沢の浅野川の近くに北枝の立意庵があり、そこで秋の納涼の句座が開かれたそうです。そのときの芭蕉の句は、「あかあかと日は難面（つれなく）も秋の風」（山本健吉「奥の細道を詠む」河出文庫版より）。

（1）カヤツリグサ（種名）に近いカヤツリグサの仲間

カヤツリグサ、チャガヤツリ、コゴメガヤツリはみずき野周辺に数多く見られます。どの種も茎の先端から、穂をつけた数本の枝が出ます。カヤツリグサとチャガヤツリは一見よく似ていますが、カヤツリグサはそれぞれの穂が通常三叉に枝分かれしており、チャガヤツリでは枝分かれしていません。コゴメガヤツリは、カヤツリグサより穂の枝分かれが多く、また穂のかたちが異なるので、前二者とは容易に区別がつかます。



カヤツリグサ
7月中旬
貝塚地区



チャガヤツリ
8月上旬
貝塚地区

コゴメガヤツリ

7月中旬

貝塚地区



そのほかにも、この仲間にはたくさんの種があります。みずき野周辺でよくみられるものを写真で示します。

左上：イガガヤツリ（9月上旬）

右上：アゼガヤツリ（8月下旬）

左下：ハマスゲ（7月上旬）

右下：カワラスガナ（9月下旬）

いずれも本町地区にて撮影

イガガヤツリやハマスゲはみずき野周辺の日当りのよい比較的乾いた場所に見つかります。

アゼガヤツリとカワラスガナは水田や湿地を好みます。



左上：ヒナガヤツリ
（8月下旬）

右上：ヌマガヤツリ
（9月中旬）

右下：タマガヤツリ
（8月上旬）

左下：ヒメクゲ
（9月上旬）

本町地区または
貝塚地区にて撮影

ヒナガヤツリ、ヌマガヤツリ、タマガヤツリ、ヒメクグはいずれも湿地に多い植物です。写真では大きさがはっきりしませんが、ヒナガヤツリは特に小さいカヤツリグサで、稈の高さは5～20センチ、一方ヌマガヤツリは大きなカヤツリグサで、稈の高さは80センチに達するものがあります。タマガヤツリとヒメクグは球状の穂をもち、見分けやすいカヤツリグサです。

(2) 外来のカヤツリグサ2種

キングヤツリ(別名ムツオレガヤツリ)は、熱帯アジア原産といわれ、亜熱帯、温帯に広く分布するカヤツリグサで、日本にも小笠原や南西諸島に古くから定着していた種です。私の手元にある北村四郎ら著「原色日本植物図鑑(下)」(保育社1964年発行)には、本州での生息地は千葉県だけとなっていました。また「もりやの自然誌」(教育委員会発行)の守谷市(当時守谷町)の野生植物のリストには1993年にキングヤツリが記録されていますが、危急種となっていました。しかし今は本町や貝塚地区の水田のほとりにたくさん生えています。



キングヤツリ
9月上旬
貝塚地区

2011年夏、まだ見たことのなかったカヤツリグサを貝塚地区で1本を見つけました。図鑑などで調べると、どうやらユメノシマガヤツリらしいことが分かりました。ユメノシマガヤツリはアフリカ南部からオーストラリアにかけて原産する植物で、日本では、東京湾の埋立地夢の島(江東区)ではじめて発見されたカヤツリグサです。その後、東京都、神奈川県、千葉県で増えているようですから、茨城県南で見つかるのも不思議ではありません。

ユメノシマガヤツリ
7月下旬
貝塚地区



(3) 「イ」と名の付くカヤツリグサたち

畳の材料となるイグサはイグサ科の植物で、別名を「イ」と言います。ホソイ、クサイなどはイグサ科の植物ですが、「イ」と名の付く植物はイグサ科よりもカヤツリグサ科の植物の方に多いようです。それらは一見イグサに似ているので、「イ」の名が付けられたのでしょう。

みずき野周辺で「イ」の付くカヤツリグサには、フトイ、ホタルイ、サンカクイ、カンガレイ、ヤマイ、ハリイ、などが見られ、いずれも水田または湿地に生えています。フトイ、ホタルイ、サンカクイ、カンガレイは同属のカヤツリグサです。ヤマイは後に述べるテンツキやヒデリコに近いカヤツリグサです。ハリイはヤマイに似ていますが、別属の種です。



左上:フトイ	6月下旬
右上:サンカクイ	6月中旬
左下:ヤマイ	7月下旬
右下:ハリイ	7月上旬

サンカクイはカンガレイと
区別しにくいですが、小穂の特徴
からサンカクイとした。

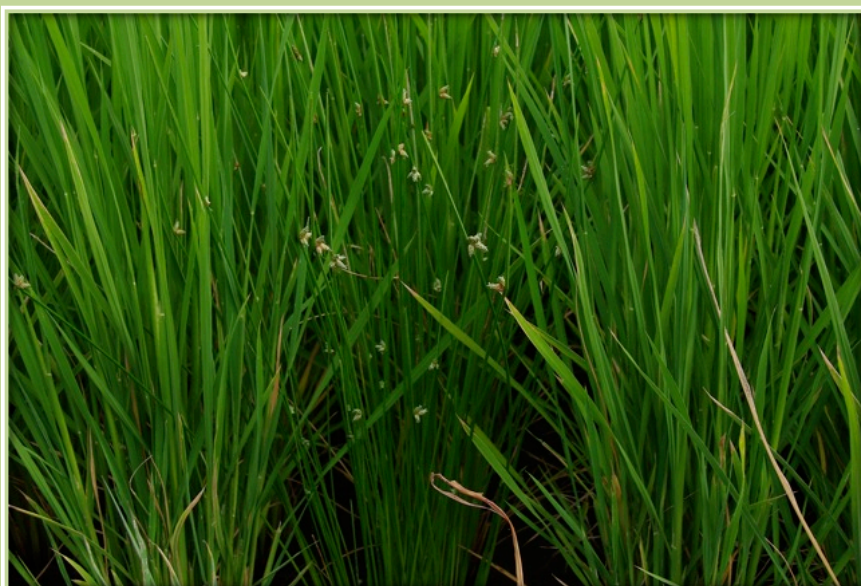
フトイ、サンカクイは
本町地区にて撮影
ヤマイはさくらの杜公園、
ハリイは第2調整池にて撮影

イヌホタルイ

7月下旬

貝塚地区

水田の中で、イネと並んで、イネそっくりの姿で生えていた



(4) ヒデリコとテンツキ

田の畦で見られる普通のカヤツリグサたちです。カヤツリグサの場合、穂の先の花のかたまりの部分を小穂といいます。ヒデリコは高さ20～30センチほどで、球状の小穂をつけているので、一見して分かります。



ヒデリコ

7月中旬

本町地区

テンツキはヒデリコに似ていますが、ヒデリコより細長い小穂をもっています。写真のものはテンツキと判定しましたが、テンツキには変異が多い上に、近似種が多く、判別の難しい植物です。

テンツキ
8月下旬
本町地区



テンツキは20～50センチほどの高さがありますが、よく似たメアゼテンツキは10～20センチほどの小さなテンツキの仲間、周辺の水田近くによく見られます（写真省略）。

（5）大型のカヤツリグサたち

ウキヤガラは1メートル以上の大型のカヤツリグサで、以前は貝塚地区の休耕田にたくさん生えていました。しかし近頃、休耕田が水田に復帰する傾向があり、ウキヤガラはみずき野周辺に見られなくなりました。しかし、守谷市北部の大山新田の湿地には、この植物が数多く見られます。



ウキヤガラ
5月下旬
貝塚地区

マツカサススキは1メートル半に達する大型のカヤツリグサで、さくらの杜公園東側の上高井地区に多く見られます。マツカサススキという名は憶えやすいのですが、奇異に感じられる名称です。



マツカサススキ
8月中旬
さくらの杜公園東、
上高井地区

エゾアブラガヤはやはり高さ1メートル半に達する大型のカヤツリグサです。マツカサススキより小さい丸い小穂をびっしりとつけた姿は独特のものです。以前3丁目の東土手下の上高井地区側にこの植物を数本見付けたのですが、その後は見ておりません。



エゾアブラガヤ
8月中旬
3丁目東、
上高井地区

(6) カヤツリグサ科植物の実用性

カヤツリグサ科に最も近縁な科はイグサ科ですが、イネ科にも類縁関係があります。カヤツリグサ科もイネ科も非常に多くの種を含む科で、外観もよく似ているにもかかわらず、カヤツリグサ科はイネ科と比べると、人間にとって有用な種が極めて少ないのです。

イネ科は、イネ、ムギ類、トウモロコシ、アワ、ヒエ、キビ、ソルガムなどの穀物、牧草、芝草、タケやヨシなどの工芸作物、藁葺き屋根に用いるカヤなど、多くの有用な作物を含んでいます。イネ科の植物がなかったら、われわれの生活はどんなに乏しいものであるか、容易に想像できます。

それに対し、カヤツリグサ科の植物では、人間の役に立っているものは、ずっと少ないようです。私には、古代エジプトで最初に紙の材料とされ、その後ギリシャなどヨーロッパの国々でも同様に使用されたパピルス、また日本で菅笠や蓑の材料として使われたカサスゲを思いつく程度です。しかし、小山鐵夫によれば、ハリイの仲間のオオクログワイの塊茎が中国料理などに使われ、またペルーとボリビアの国境にあるチチカカ湖に生えるフトイの一種トトラの茎で、周辺に住むインディオはバルサという独特のボートを作り、またスリランカではフトイの一種オオサンクイを用いて種々の敷物を作るのだそうです(週刊朝日百科「世界の植物」より)。

でもまあ、カヤツリグサの利用例はこの程度ですから、カヤツリグサがなくても、われわれの生活にはさしたる影響はなさそうです。そんなこともあってか、カヤツリグサは控え目で、人の目を引くこともほとんどありません。でもよく観察すると、芸術的ともいえる端正な姿に気が付きます。野にあってこんなにきれいなのに控え目なことや、蚊帳釣り遊びのなつかしさから、私はカヤツリグサに特別な親しみを感じています。

行き暮れて蚊帳釣り草にほたるかな

各務支考



支考はやはり芭蕉の門人。カヤツリグサが田舎の小川のへりに生える夕暮れ、昔はホタルが飛び交ったものです。そんな場所に生まれるホタルは大きなゲンジボタルでなく、優しげなヘイケボタルではないかと想像しています。

今回のコラムには、スゲの仲間を含めませんでした。カヤツリグサ科では大きな一群なので、機会があればスゲについても書いてみたいと思っています。

2014年
10月
本吉總男